

## ゆるーい表情とポーズに注目。こんな鬼なら鬼も内？

よこい きんこく おにげんしょう じがきん  
横井金谷画「鬼玄象自画賛」(草津市蔵・中神コレクション)



1年の季節の代わり目、立春、立夏、立秋、立冬。その前日が季節を分ける節の日と設定されていました。しかし、現在では2月の立春の前日だけが「節分」として残っています。立春は春のはじまりで、季節の変わり目に起こりやすい災難や病気を鬼に見立てて豆をまき、厄を払う風習が生まれました。節分の豆まきの由来は「追儺(ついな)」の行事に始まり、平安時代に豆をまき鬼を追い払うというかたちになりました。仏教では、鬼が煩惱と呼ばれる人々の欲望に住み、それが災いとなることから、江戸時代には鬼を追い払う節分の行事として各地で催されるようになったといわれています。

さて、草津市が所蔵する中神コレクションのなかから、鬼に因んだ作品を一つ紹介します。横井金谷の描く「鬼玄象自画賛」です。横井金谷は江戸時代後期に活躍した画僧で、栗太郡下笠村(草津市下笠町)に生まれ、与謝蕪村の影響をうけていることから「近江蕪村」とも呼ばれています。彼は、生涯を通して大坂や江戸、京都、名古屋などを転々とし、各地に作品を残しました。この作品には文化戊寅年(文化15、1818年)の年記があり、『今昔物語集』巻第24の「玄象という琵琶が鬼にとられた話」を題材としたものです。画賛には次のような説話が綴られています。平安中期の村上天皇の御代、唐伝来の琵琶の名器「玄象」が鬼に盗まれ、突然消え失せてしまいます。ある夜、その音色を耳にした源博雅が、音を頼りに平安京を南へ南へと探しあるくと、羅城門へとたどり着きます。そこでは、楼上で鬼が玄象を弾いていました。天皇が探し求めている玄象を探しに来たと伝えて、鬼から玄象を返してもらったというものです。

節分の鬼とは直接関係はありませんが、蕪村の影響を受けた作品が多いなかで、金谷自身が『今昔物語集』のような古典にも興味をもっていたことがうかがえる作品です。

(令和4年2月・草津宿街道交流館 八杉 淳)